

時、一句目に「離家三四月（京都の家を離れてもう三、四箇月が経つ）」とあることから、四月か五月頃の作品だと思われる。個々の作品についての考察は別稿に譲り、本稿では『菅家後集』の作品群の配列の考察と詩風の変遷を知る上で注目すべき作品に絞って以下その流れを三部に分けて概観してみたい。

「1 太宰府謫居一期（昌泰四年（九〇一）春〜延喜元年（九〇二）秋）」

この昌泰四年は七月十五日に「昌泰」が「延喜」に改元されている。（『日本紀略』醍醐天皇・昌泰四年七月十五日の条に、「改昌泰四年爲延喜元年」とある。）この年には「484 敍意一百韻」を始めとする「477 詠樂天北窓三友詩」「486 哭奥州藤使君」等二十韻以上の長編の大作が矢継ぎ早に詠作されている。いずれも秋までに詠まれたものだと考えられる。右大臣の地位から突如として職を解かれ、太宰府に左遷させられたその現実を直視できるだけの精神的余裕を持ち得ず、それをどう受け入れればいいのかに苦悩する、その痛々しいほどの心の葛藤が作品の根底に流れているものが、この期のものと考えられる。ここでは、次の「485 秋夜 九月十五日」を挙げてみる。

485 秋夜 九月十五日

黄萎顔色 白霜頭

黄萎の顔色 白霜の頭

况復千餘里 外投

況んや 復た 千余里の外に投するをや

昔被榮花 簪組縛

昔は榮花 簪組に縛せられ

今爲貶謫 草莢囚

今は貶謫 草莢の囚と為る